



画面操作で独自の演出ができる視覚音楽

“フィデリオ 21 世紀”

音楽：ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン作曲「フィデリオ」2 幕目の場面から（1814 年）、レナード・バーンスタイン指揮（1978 年録音）、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団、ルネ・コロ（フロレスタン）、グンドウラ・ヤノヴィッツ（レオノーレ）、ハンス・ゾーティン（ドン・ピツァロ）、マンフレッド・ユンクヴィルト（ロッコ）

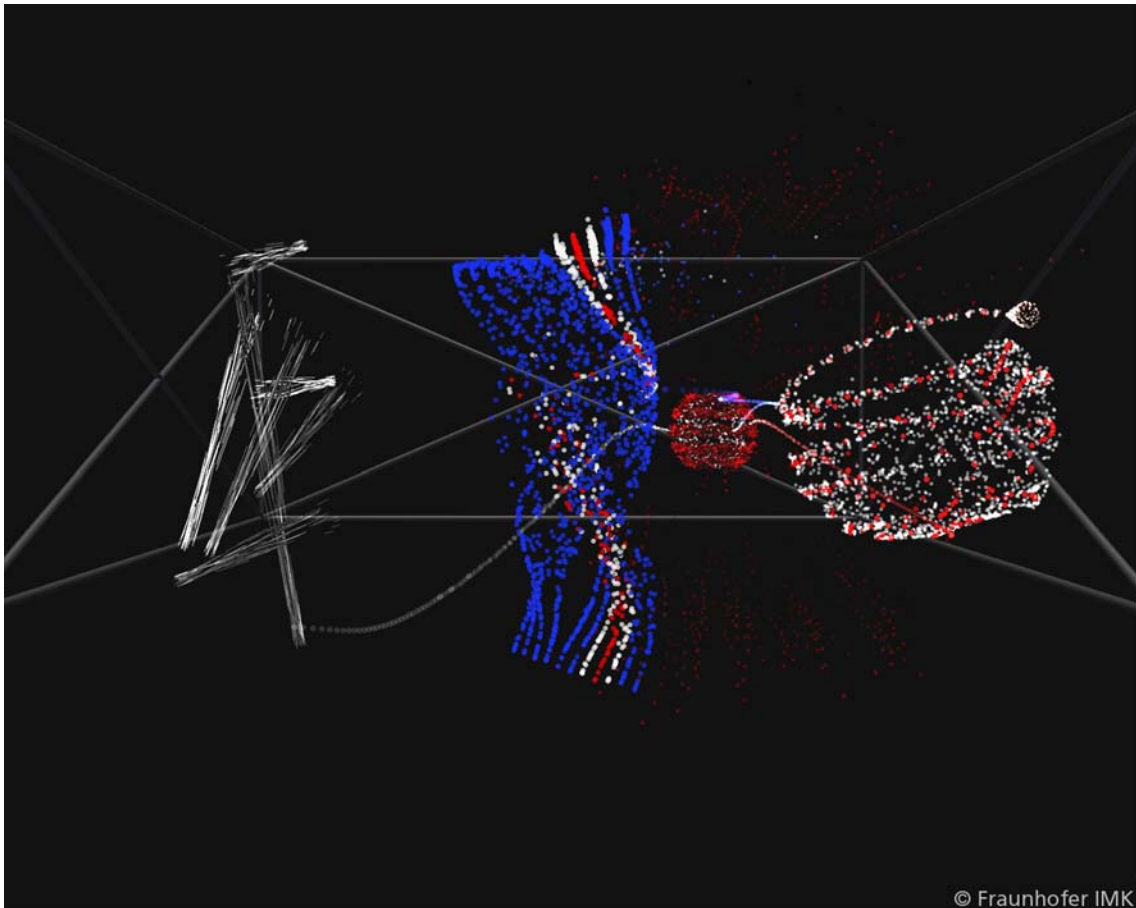
制作：ヨハンナ・ドムボア（演出／芸術監督）、ウリ・レヒナー（視覚効果監督）、フロリアン・ドムボア（アイデア、構想、企画監督）、ベートーヴェン・ハウスのための制作で、ヴェルティゴ・システムズ有限会社、rmh — ニューメディア有限会社、©ブラウンホーファー研究所 — メディアコミュニケーション、ザンクト・アウグスティン（2004 年）の共同作業

上演時間：20 分

“フィデリオ 21 世紀”はクラシック・オペラ中、初めて三次元グラフィックと音響（三次元、仮想現実または仮想環境）を用いて演出されたものです。オペラの中に登場する人物は、小さな粒子（パーティクル・システム）から成る抽象的な形で作られています。これらの形は、音楽的、演劇的条件に応じてダンス的な動作で音楽の流れを表現します。さらに、操作機で画面を操作し、演出することも出来ます。

ストーリー：制作に選ばれた場面は、ベートーヴェンのオペラ“フィデリオ”のストーリーが主軸になっています。フロレスタンは決闘相手のピツァロに敗北し牢獄につながれます。（序奏）そこで幻の中に妻のレオノーレが天使として現れます。（アリア“人生の美しい春に”）牢獄の看守ロッコがピツァロを招き入れて（ホイッスル）、ピツァロはフロレスタンを短剣で殺そうとします。フィデリオ（男性に偽装したレオノーレ）が二人の間に入り、自分の素性を明らかにし、短剣を持つピツァロから夫のフロレスタンを救い出します。（四重唱“彼は死ぬ”）二人は共に救出、再会、解放、ピツァロの無力化を祝います。（二重唱“言いようもない嬉しさ”）

登場人物：動く粒子によって作られたオペラの登場人物は、特徴的なフォームと色で見分けられるようにされていて、音楽の密度や強度によって変化します。



左から右へ：ピツァロ（白い棒）、レオノーレ（青い壁または波型）、ロッコ（触手の付いた赤と白の二球）、フロレスタン（白と赤の螺旋）、牢獄は幾何学的に配列された棒からなっています。

画面演出操作機：画面が設置されている部屋にある、4個の画面演出操作機によって、見学者はオペラの実演中に定められた範囲で、視覚的、聴覚的出来事を操作することができます。この機械の操作で、登場人物とそれに付随した声を、画面の他の場所へ移動させることができます。見学者はこれによって、自分の演劇的イメージを表現することができます。画面演出操作機は形によって配分され使用準備が完了すると光ります。

ロープ — フロレスタン（螺旋形）

球 — ロッコ（球状形）

円柱 — レオノーレ／フィデリオ（壁形）

ジョイスティック — ピツァロ（棒から組み立てられた形・制御装置）

より詳しい視覚音楽についてのインフォメーションは

www.beethoven-haus-bonn.de をご覧下さい！一階にある“デジタル収集スタジオ”と隣のベートーヴェン生家博物館もご見学下さい！